ごあいさつ

公益財団法人かながわ考古学財団は、文化財保護法の趣旨が生かされるよう、神奈川県内の発掘調査を行うとともに、その調査成果を広く公開し県民の皆さまが活用できるようにすることにより、学術・文化の振興と地域文化の発展に寄与することを目的として活動しています。

この考古学特別研究講座では、これまで当財団が発掘調査を行った県内各地の遺跡について、その調査結果をまとめた発掘調査報告書の成果から導き出された地域の歴史像を研究し、提示いたします。新たな問題提起をすることにより、埋蔵文化財に対する興味・関心と理解をより深めていただくことを目的とするもので、今回で5回目の開催となります。

いわば当財団の調査研究の集大成とも言うべき普及事業であり、例年同じ内容の報告を午前と午後に行うことで、より多くの方々にお集まりいただくこととしています。

今回のテーマは「小出川河川改修事業関連遺跡」で扱いました七堂伽藍跡について取り上げます。七堂伽藍跡は「下寺尾官衙遺跡群」を構成する一遺跡として、平成27年3月に国指定史跡となりました。伽藍域の調査は茅ヶ崎市による成果が大きいですが、寺域を含めた周辺の調査は当財団の調査成果が中心となっています。今回は、「周辺の調査から見た七堂伽藍跡」という少し変えた視点ですすめていきますがどのような展開となりますでしょうか。もちろん、今回の講座だけでは到底語り尽くせません、皆さまのご高評を仰ぎながら、この考古学特別研究講座を更に深化させてまいりたいと思いますので、ご支援の程をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、当財団の事業に関して日頃よりご指導、ご協力を賜っている関係諸機関･諸氏とご活用、ご支援をいただいている県民の皆さまに、お礼を申し上げます。

2017(平成29)年8月

公益財団法人かながわ考古学財団
理事長　村山正和

事例報告１

かながわ考古学財団の調査から見た茅ヶ崎市七堂伽藍跡

（公財）かながわ考古学財団　調査研究部
調査課　川嶋実佳子

１．はじめに

茅ヶ崎市七堂伽藍跡は、『７世紀末から８世紀前半に創建され、８世紀後半の再建期、改修期の９世紀第２四半期中頃を経て９世紀後半に廃絶期を迎え、10 世紀後半から 11 世紀代に仏堂が建てられていたと考えられている』（茅ヶ崎市教育委員会 2015）古代寺院跡です。北側の台地上にある高座郡衙とともに下寺尾官衙遺跡群として平成 27（2015）年３月 10 日に国指定史跡に指定されています。七堂伽藍跡の調査は、茅ヶ崎市教育委員会が平成 12 年度以降 16 次調査（平成 25 年（2013）時点）まで継続的に確認調査を行っていますが、かながわ考古学財団では小出川河川改修事業に伴う七堂伽藍跡の発掘調査を行っており、寺院西側周辺の様相がわかってきました。今回は、寺院を取り巻く集落について検出された遺構（住居址）のあり方やそれに伴う遺物の出土状況から七堂伽藍跡との関わり合いについて考えていきたいと思います。

２．かながわ考古学財団による七堂伽藍跡の調査

七堂伽藍跡は茅ヶ崎市№34 遺跡として神奈川県茅ヶ崎市下寺尾 159 他に所在し、高座丘陵の南西縁を南西から南へ流れを変える小出川と、南を流れる駒寄川に挟まれた砂丘上及び沖積低地に立地しており、標高は７ｍ～10ｍを測ります。

かながわ考古学財団による七堂伽藍跡の発掘調査は、小出川河川改修事業に伴うもので平成 13 年度から 20 年度まで実施されており、その報告は『かながわ考古学財団調査報告』224・251 に収められています。主に集落における成果を報告している『かながわ考古学財団調査報告』251 によると、発見された遺構・遺物の年代は縄文時代、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から奈良・平安時代、中世、近世以降が報告されており、連綿と土地利用されていることがわかります。調査箇所は小出川左岸縁辺部のため、茅ヶ崎市教育委員会の確認調査により明らかになってきている七堂伽藍中心部から西へ 150m ほど離れていますが、特に七堂伽藍存続時期とされる古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居址 89 軒、竪穴状遺構 10 軒、掘立柱建物跡 20 棟、幢竿支柱（どうかんしちゅう）（仏教用具の旗を掲げるための旗竿を固定する２基の支柱用の柱穴）を含む柱穴列 12 箇所、その他溝状遺構、土坑、ピット群、土器集中、旧河道など多種にわたり発見されています。遺構数、遺物量から見ても古墳時代後期から奈良・平安時代がこの遺跡の主体の時代であることがわかります。

３．発見された遺構―竪穴住居址―から

発見されたこの時期の 89 軒の竪穴住居址の分布は、調査区の東寄りの砂丘上に広くかなり密集しているように見受けられます。しかし第３、４図の依田氏による時期別変遷図（依田他 2013）から住居址を概観すると、以下のようなことがわかってきます。7 世紀代は８、９軒でしたが、創建期とされる 7 世紀末から８世紀初頭から前葉には 13 軒に増加しています。８世紀中葉には４軒と減りますが、再建期の８世紀後葉から９世紀中葉の改修期を経て９世紀後葉まで６～８軒と定着しています。10 世紀前半は３、４軒とまた減少しましたが、10 世紀後半から 11 世紀には 10 軒と増加しています。この現象は未調査部分の今後の成果により変わってくると思いますが、全体的に数軒は常に存在し、寺院の動向に呼応するように爆発的ではないにしても、人口増減の様相が見て取れます。

４．住居出土遺物と出土状況から

89 軒の竪穴住居址から多種多様な遺物が出土しています。時期別に見てみると創建期前後の出土遺物は土師器が主であり、あまり特殊な遺物は出土していないようです。しかし再建期後は様相が大きな変化が見られます。まず、８世紀後葉の再建期ではH34･36 号竪穴住居址から鍛冶関連遺物である椀型滓や刀子・釘など鉄製品などが出土しています。小規模な鍛冶炉が発見されているH36 号竪穴住居址は、H34 号竪穴住居址に壊されているため、出土した鍛冶関連遺物はH36 号竪穴住居址の遺物の混入と考えられています。工房として機能したものかははっきりしませんが、寺院再建に関して工人などの存在が想定されます。その後９世紀から廃絶期まで須恵器の出土が増加し、灰釉陶器、緑釉陶器が流通と同時か少し遅れて出土するようになります。寺院関連遺物として瓦は連綿と出土していますが、その他、須恵器鉄鉢、灰釉陶器椀、皿、瓶、緑釉椀、硯、土師器灯明皿などが出土しています。

さらにこれらの特異な遺物出土状況の竪穴住居址の様相を３例挙げてみます。

まず、H72b 号竪穴住居址床面直上から正位で、口縁部は欠損しているもののほぼ完形で須恵器平瓶が出土しています。H72b 号竪穴住居址を嵩上げしてH72a 号竪穴住居址を構築している事から、「H72a 号竪穴住居址への更新に伴う儀礼的な埋設か」と報告されています。

次にH45 号竪穴住居址では須恵器の鉄鉢型土器が覆土下層から出土しています。鉄鉢は僧が托鉢で食物を受けるのに用いるもので、その形状から寺院関連遺物としてあげられます。そのような遺物が床付近から出土していることは注目されます。

H24 号竪穴住居址は１軒からの出土量が多量で、実測できる灰釉陶器椀・皿 12 点という数量は特筆されます。特に注目されるのは出土状況で、数片に割れた個体が住居に覆土下層から床面直上に撒かれたように出土している点です。まだ一般集落には浸透しておらず、寺院や役所などでの公的施設で使用される猿投産の灰釉陶器の良好な一括資料が、１軒の竪穴住居址からまとまって出土し、その灰釉陶器を住居の南東側に撒いている様にも受け取れる出土状況は住居廃絶時の儀礼祭祀行為と考えてもよいのではないでしょうか。

５．まとめ

七堂伽藍跡から出土する遺物は、寺院が運営される頃からその様相が一般集落とは少し変わることがわかってきました。仏教が入ってくる以前から、自然などあらゆるものに畏怖畏敬の念を持っていた人々は、住まいを移すときは竈を破壊し、廃絶する住居に大切なもの、特別なものを残していく事例はたくさんあります。それが七堂伽藍跡では寺院関連遺物が出土し、儀礼祭祀行為が色濃く反映された出土状況を示しています。住居廃絶時の儀礼祭祀行為として、床に置くあるいは埋める、撒くという様相も見えてきました。ではその遺物が寺院所有のものであれば、どのような理由でまたは経緯でこれら竪穴住居址に存在しているのでしょうか。単に近くにあったために使用したものなのか。はたして使用して良かったものか。或いは竪穴住居が一般の住居ではなく、寺院と関連する特別な施設だったためなのでしょうか。特別な施設というほどの特殊遺構は確認されていません。しかし、一般の集落では出土しない特殊遺物を多く出土している状況から、少なくとも寺院との関わりのある何らかの「役割を担っていた住居」であったのではないかと考えてもよいのではないでしょうか。

引用・参考文献

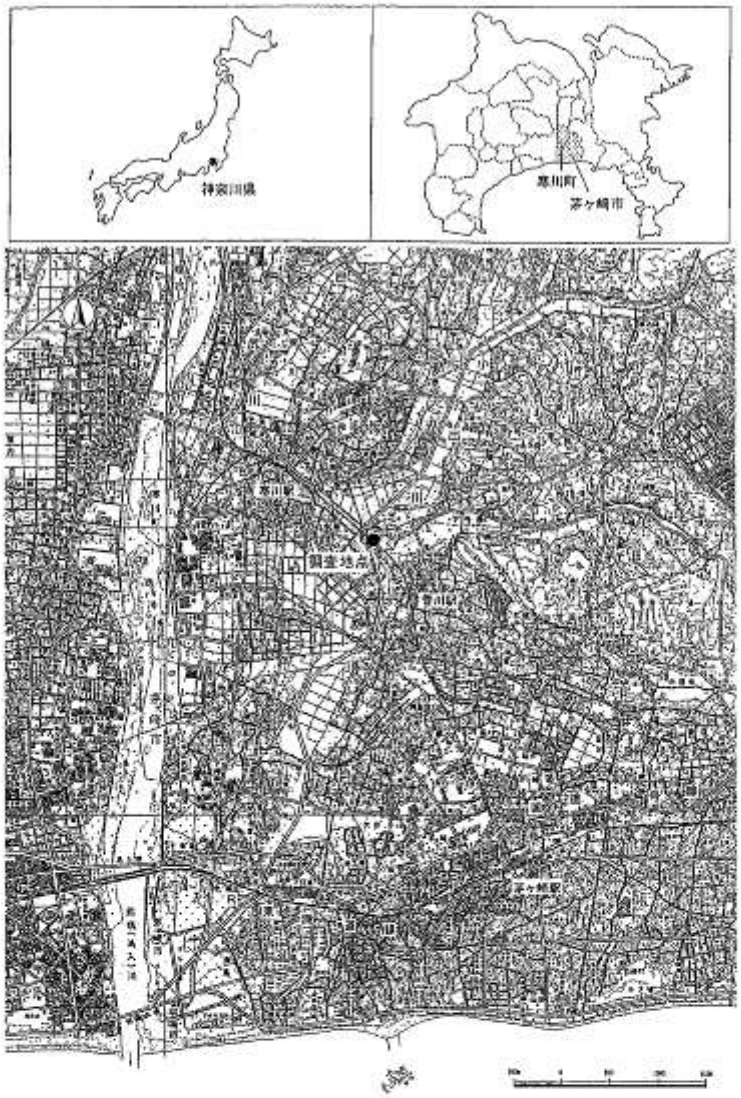
小川岳人他 2008『小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告 224

依田亮一他 2010『小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告 251

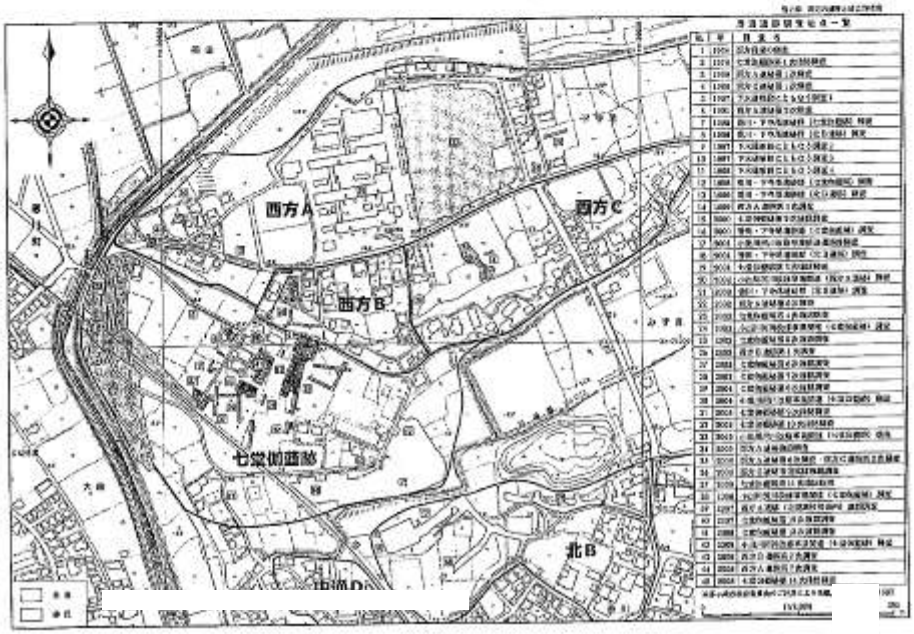
新倉香・依田亮一 2013「高座郡衙・下寺尾廃寺周辺の集落景観と律令祭祀―小出川河川改修事業関連遺跡群の調査成果を中心として－」『神奈川考古』第 49 号

大村浩司他 2013「神奈川県茅ヶ崎市下寺尾官衙遺跡群の調査～下寺尾七堂伽藍跡・高座郡衙の調査～」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』40

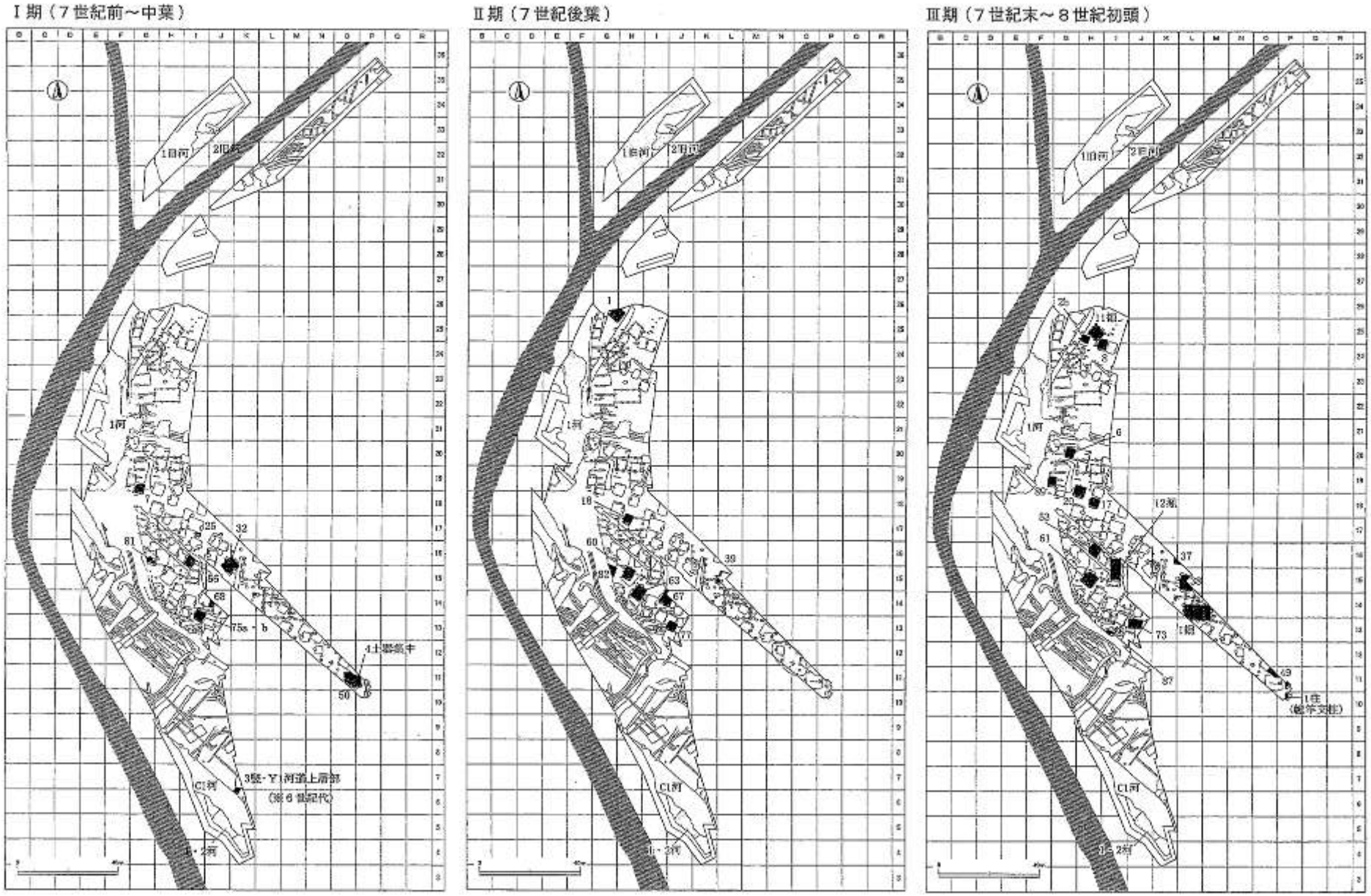
茅ヶ崎市教育委員会 2015『国指定史跡　下寺尾官衙遺跡群』



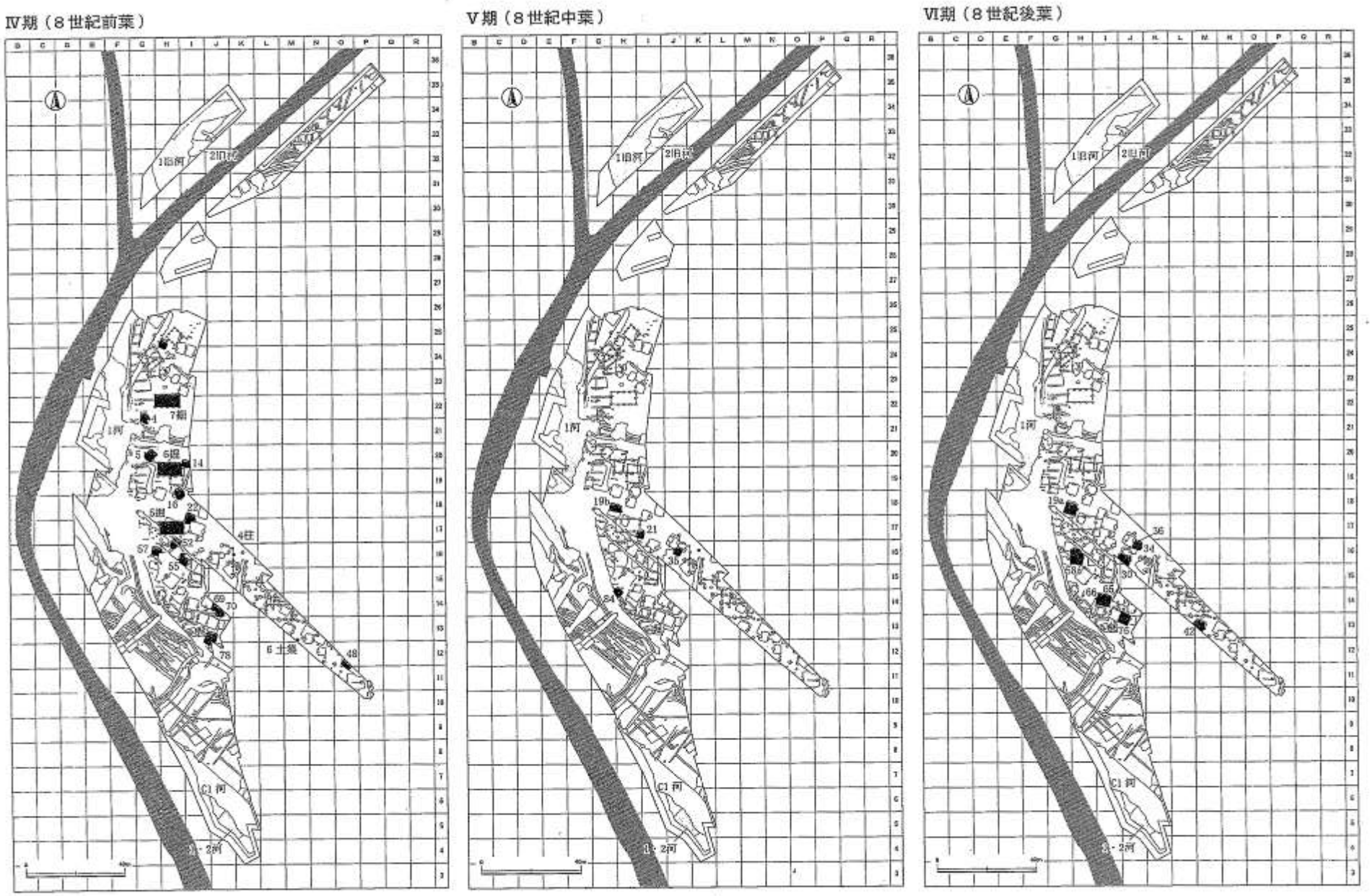
第１図　調査地点位置図（(財）かながわ考古学財団 2010 より）



第２図　調査地点図と周辺の遺跡（(財）かながわ考古学財団 2010 より）

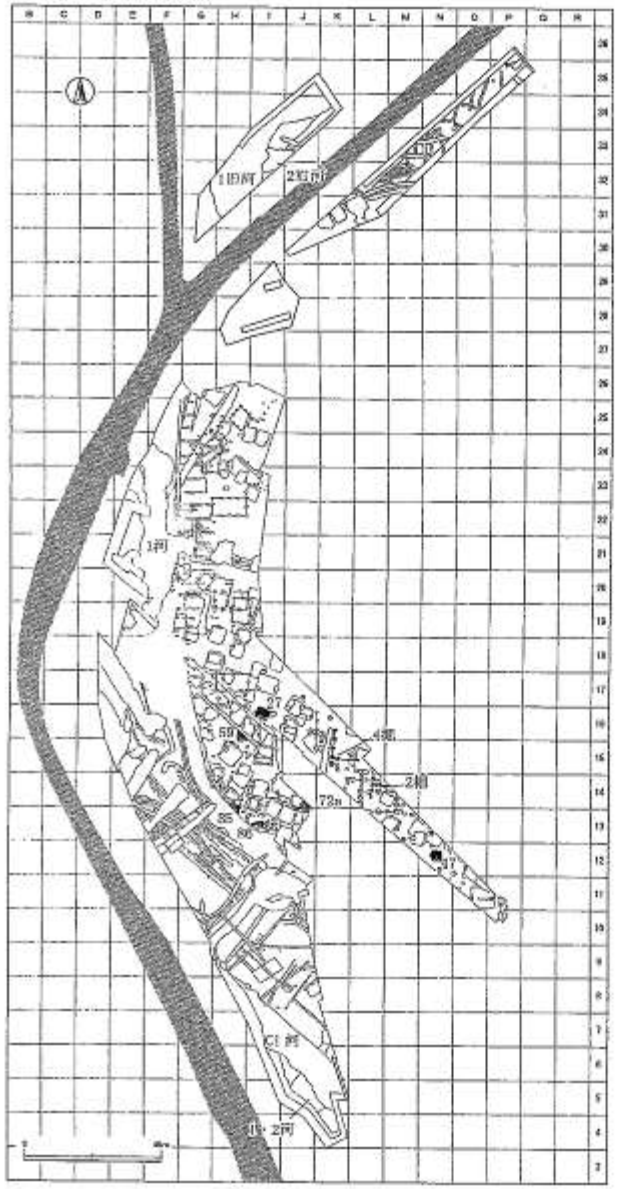


第３図　集落の時期別変遷図（１）（依田 2013 より）

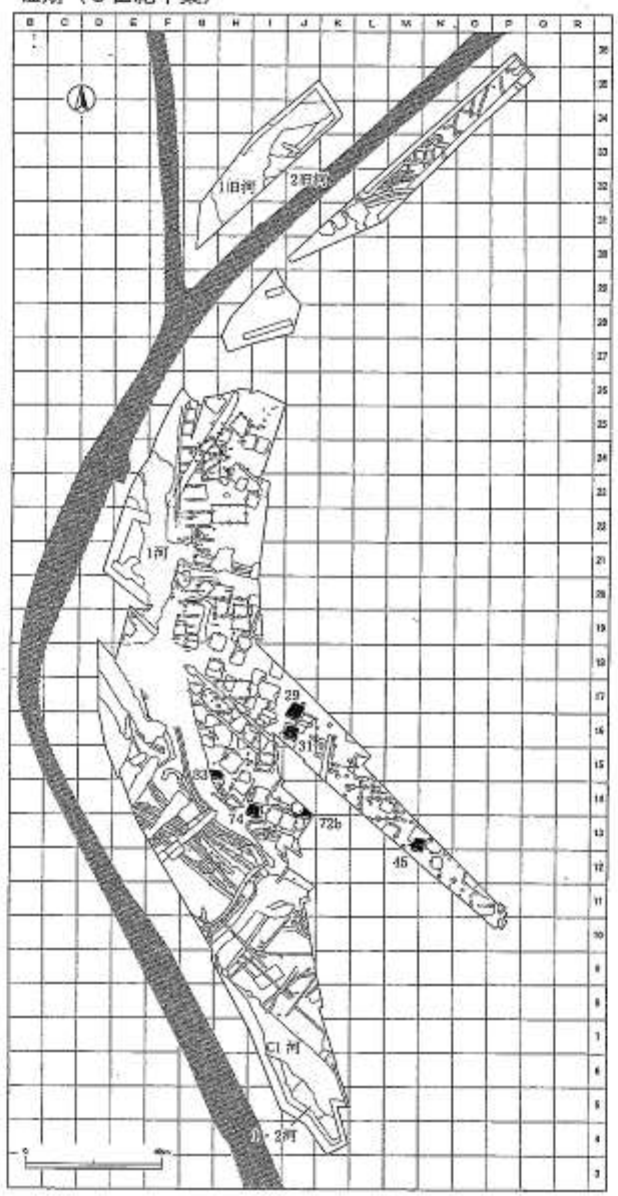


第４図　集落の時期別変遷図（２）（依田 2013 より）

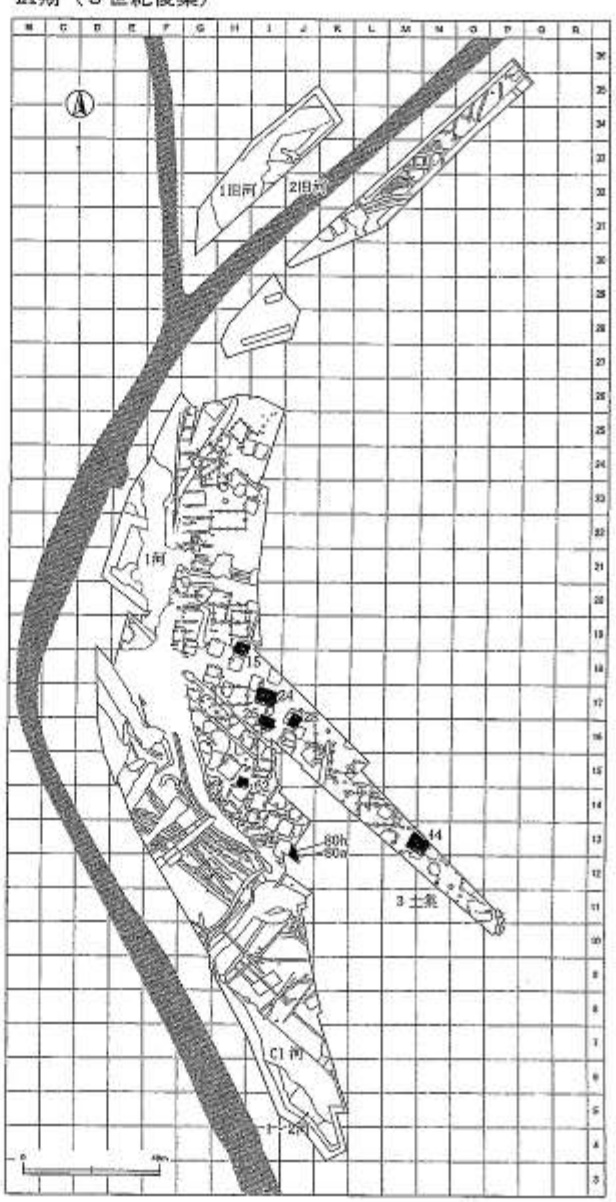
Ⅶ期（９世紀前葉）



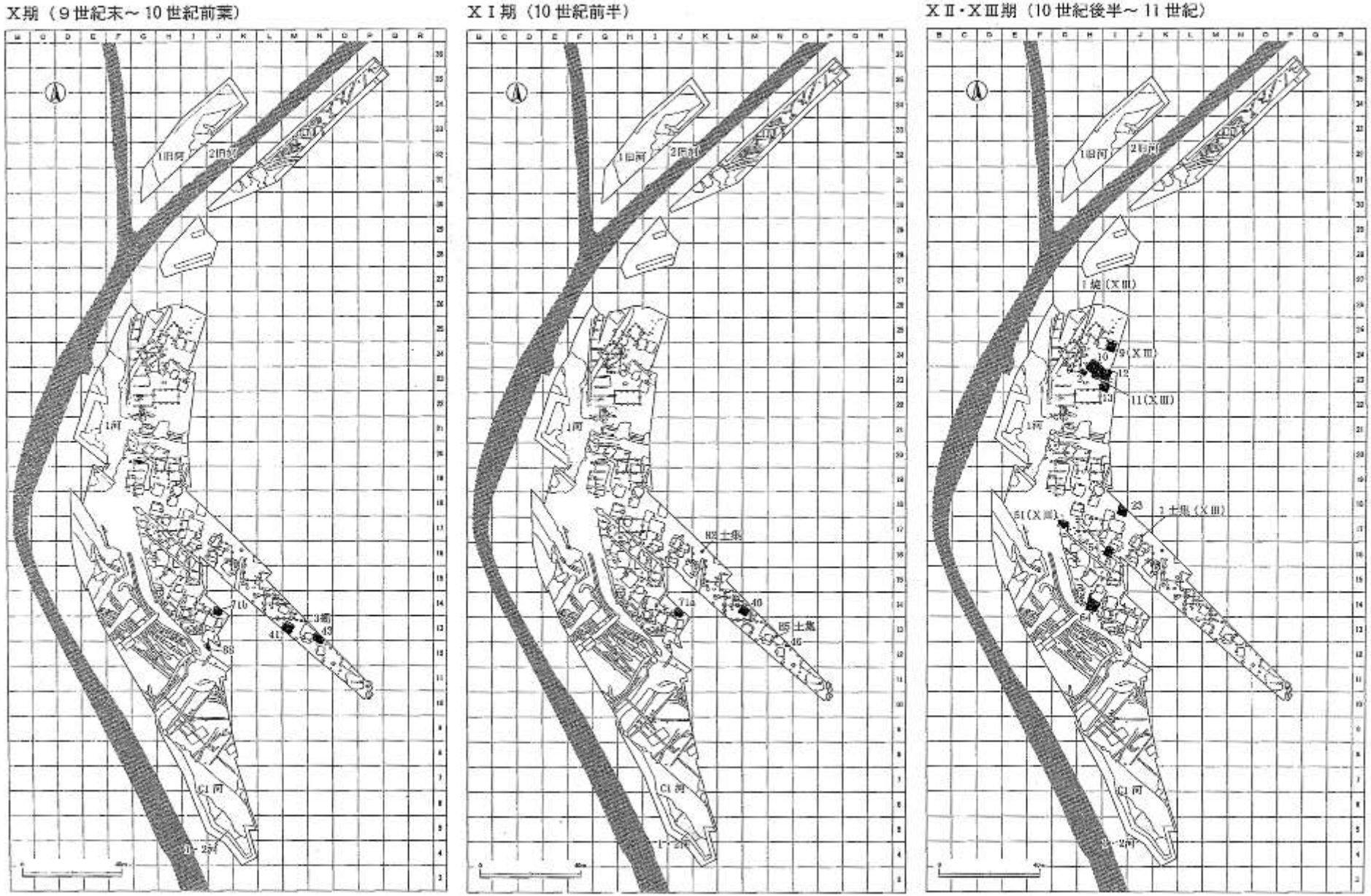
Ⅷ期（９世紀中葉）



Ⅸ期（９世紀後葉）

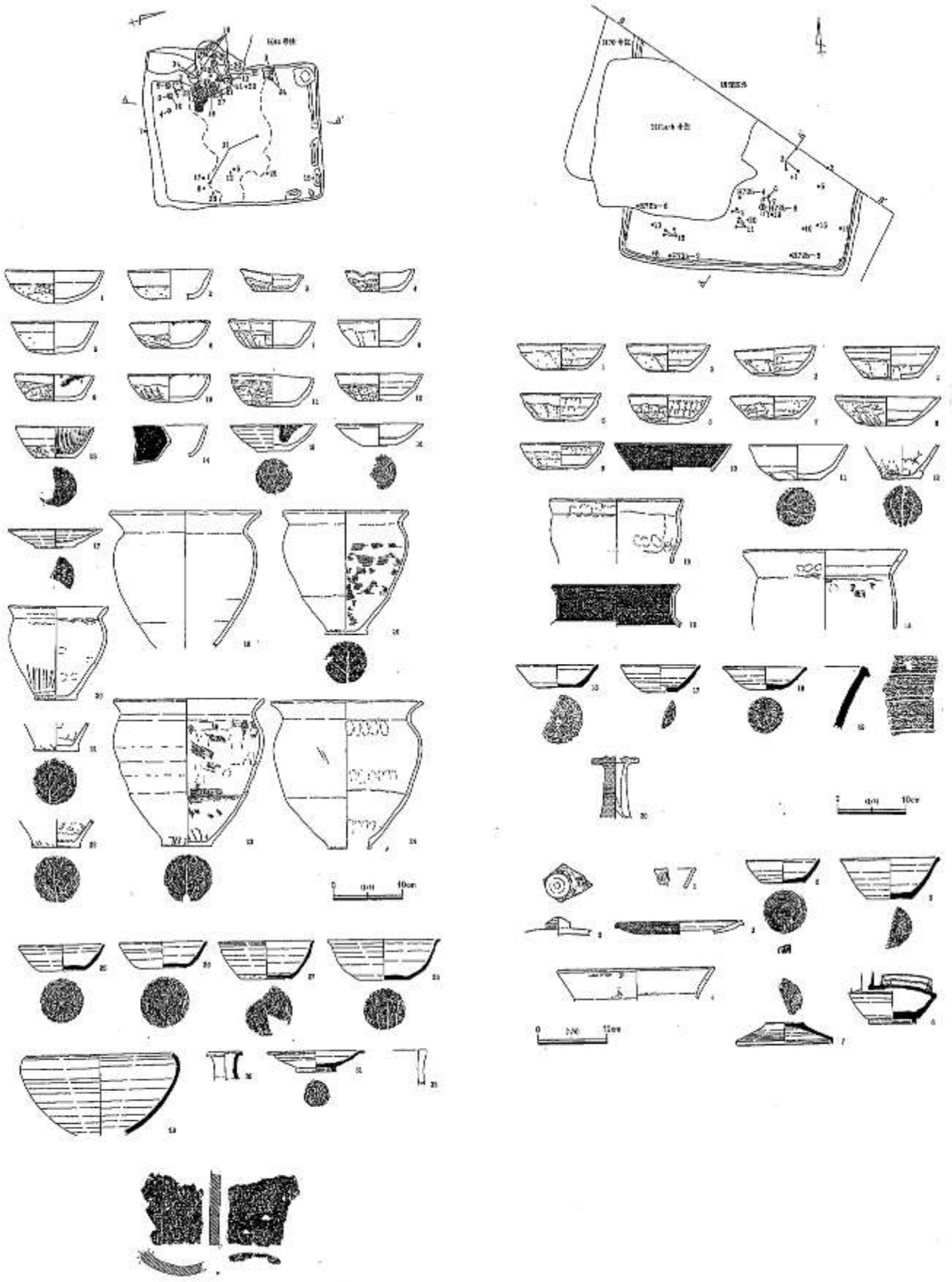


第５図　集落の時期別変遷図（３）（依田 2013 より）



第6図　集落の時期別変遷図（4）（依田2013より）

第 7 図　H24 号竪穴住居址出土遺物と出土状況（(財) かながわ考古学財団 2010 より）



第 8 図　H45 号・H72a・b 号竪穴住居址出土遺物と出土状況（(財) かながわ考古学財団 2010 より）